

第270回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
— 「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ (23)

第10章 「日本ルネッサンス史論」の完成 (1967-1969)

4 具体的な内容はどういうものか

『総論編』各章の内容をごく簡単に紹介していこう。膨大な分量をバランスよくコンパクトにまとめることはきわめて難しい。漏れ落ちる論点が多々あることをご寛恕願いたい。

『総論編』

第1章 序説

福本以前には、日本におけるルネッサンスとマニファクチュアの関係について本格的に論じた歴史家、研究者はいなかった。福本は、日本ルネッサンス史論のために農林業論、マニファクチュア論、北斎論などを準備してきたことに触れ、日本ルネッサンス史論と日本マニファクチュア史論の関係を確認する(既述)。

今まで日本ルネッサンスが発見されなかった理由は6つある。第1に、江戸時代の文化史研究がそれ以外の時代に比べて遅れていたこと。第2に、江戸時代の学問の興隆が幕府の文教政策に対する反抗運動として起こった側面を閑却していたこと。第3に、日本における宗教改革を鎌倉仏教に限定してしまい、江戸時代の官学であった朱子学に対抗した復古儒学の運動を過小評価したこと。第4に、「ヒューマニズム」にあたる語が日本にはなかったこと。第5に、江戸時代のマニファクチュアの発展に目を向けなかったこと。第6に、北斎に代表される浮世絵が一種の革命であることに気づかなかったこと。

第1章の後半はイタリアのルネッサンスとマニファクチュアの関係を扱う。特徴的なのは、イタリアで14世紀初頭に現われた複式簿記(工業簿記、日本では福沢諭吉が紹介)を取り上げ、マニファクチュアとの関係、数学者の協力(社会と遮断された和算家との比較)などを論じていることである。ケネーやマルクスのように総生産過程の経済表に類する着想が日本ではなされなかったことを指摘して第1章を閉じる。

第2章 日本ルネッサンスの時代性・階級性・革新性

日本ルネッサンスの指標は時代性、階級性、革新性(復古生新性)である。

第1に、時代性については次表が示すとおりである（前掲『著作集 第9巻』96頁）。

		1607 (家康朱子学の林羅山を用いて幕府の教学に当らしむ)
		1612-14 (漢画の狩野探幽東下)
洋書の禁	1630	
鎖国令	1633	
		1657 (明暦の大火)
		1661 (日本ルネッサンスの始まり)
		1688 } いわゆる元禄時代
		1704 }
白石の『采覧異言』 『西洋紀聞』	1713-15	
吉宗洋書の禁を弛む	1720	
吉宗青木昆陽に蘭学を修めしむ	1741-44	
司馬江漢銅版画をはじめむ	1783	
		1790 (寛政異学の禁)
洋学による自然科学の著作あらわる	1830	
蘭学者峯山・長英らつみせらる	1839	
		1841-45 (天保の改革)
		1850 (日本ルネッサンスの終り)
番書取調所設立 神田孝平の『農商弁』	1850 1857 1862	1853 黒船来航
福沢諭吉の『西洋事情』	1866	
		1868 明治維新
明六社	1873	
福沢諭吉『文明論之概略』	1875	
明治十四年政変	1881	
中江兆民の『民約論』	1882	

日本ルネッサンスは西洋に比べ、始期、終期はそれぞれ約360年、約200年遅れており、期間は160年ほど短い。西洋ではルネッサンスに先行して、①航海貿易の発展、②鉱山業・鉱山学の発展、③貨幣の流通普及と商業資本・高利貸資本・問屋制手工業・マニュファクチュアの発展、④ローマカトリック教会の支配による民衆生活の圧迫、等々が起こった。日本では①②は安土桃山時代に顕著である一方で、③のマニュファクチュア資本の発展は一般的でなく、④にあたるものはない。

日本ルネッサンスの始期とされるのは寛文年間（1661-1673）である。寛文以降、元禄直前の延宝・天和・貞享年間（1673-1688）まで広げると、復古儒学（山鹿素行、伊藤仁斎）、古医方（名古屋玄医）、歌道の復古宣言（戸田茂睡）、抜け参り、清酒の発明（伊丹の鴻池新六）、醤油醸造（野田の高梨兵左衛門ら）、カラクリ人形座（竹田近江）、捕鯨における網取法（紀州太地浦）、和算書、東廻・西廻奥州航路（河村瑞賢）、国曆制作の建議（澁川春海）、大八車の発明、三井高利（伊勢松坂から江戸へ進出、三井財閥の元祖）による呉服店・両替店の開業、点竄術の発明（代数学、関孝和ら）、談林派（俳諧、西山宗因）、『万葉代匠記』（契沖）、浮世絵（菱川師宣）、蕉風俳諧（松尾芭蕉）、『好色一代男』『日本永代蔵』（井原

西鶴)、新浄瑠璃(近松門左衛門、竹本義太夫)などの事象が確認できる。

日本ルネッサンスは嘉永3(1850)年頃に終わる。嘉永6(1853)年には黒船来航、万延元(1860)年には大老井伊直弼が桜田門外で暗殺されるなど世情は騒然としていた。

終期は始期と異なり、登場人物たちの退場(死去)が目安となる。頼山陽(史家、1780-1832)、大塩平八郎(陽明学者、1773-1837)、柴田鳩翁(心学者、1783-1839)、久米栄左衛門(技術家、1780-1841)、岩崎灌円(本草学者、1786-1842)、平田篤胤(国学者、1776-1843)、宇田川榕庵(蘭学者、1798-1846)、伴信友(国学者、1773-1846)、坪井信道(蘭方医、1795-1848)、滝沢馬琴(小説家、1767-1848)、葛飾北斎(浮世絵画家、1760-1849)、橘守部(国学者、1781-1849)、佐藤信淵(経世家、1769-1850)、水野忠邦(老中、1794-1851)、銭屋五兵衛(加賀の廻船業者、1774-1852)、安藤広重(浮世絵画家、1797-1858)、佐藤一斎(儒学者、1772-1859)らである。

第2に、日本ルネッサンスの主要な担い手は次表のとおり町人であった(前掲72頁)。その中には武士身分を捨てて町人になったものも含まれる。

本書に掲げる学芸復興家の出身階級別統計 (計不台)

	武士	浪人	儒家	医家	町人	農家	神官	僧侶	計
自伝をかいた人々	1	3		2	2				8
外国貿易家					11				13
沿岸航路開拓者・近海廻船業者					5				6
素行学派	2	2							5
仁濟学派	1		2	3	8				13
徂徠学派	7	2	1	10	4				29
陽明学の人々	4				1				5
折衷派の人々				2	2				5
国学者	10			4	8	2	6	2	30
古方家	2		6		3	3			32
折衷医家	1		2						9
和方家					1				8
兵学復興家	5	2	2	3					11
法学復興家	1		2	1			2		6
比較史学の人々		1	2	1					3
和算家	2				3				12
博物学者	5		1	6	3	1			18
地理学者・旅行家・測量家・探険家	4	2	2	4	4	2			20
浮世絵画家	1				14				15
装飾画派	1				3				4
文人画家	7	1	2	1	3	2			18
円山派・四条派	1				1	2			7
心学者					6				6
談林俳諧の人々		1		1	1				8
蕪風俳句の人々		4	1	2	8	1	1	1	19
蕪村派の人々		1				1		1	6
大坂派狂歌師					4			1	5
江戸派狂歌師	5				3				8
儒学における考証派				3	1				4
国学における考証派	1				2	1	1		6
和様書家の人々	1					1		1	3
唐様書家の人々	2		2	3	2			2	11
計	59	19	25	46	104	16			

(1) 第二、第三項は学芸復興家というわけではないがルネッサンスと関係があるので参考のためあげることとした。(2) 和算家のばあい、ほかになお町人出身者の和算家として知られるもの四人、農家出身者四人があげられる。(3) 川柳作家はほとんど全部が町人であったとってよからう。

多い順に並べると、287人の内で町人104人、武士59人、医家46人、儒家25人、農民16人、神官10人、僧侶8人となる。

第3に日本ルネッサンスの革新性は、江戸幕府が公認する武士階級のための林家の朱子学(正学)、狩野派の絵画(本画)、御家流の書法(御用書法)、後世方の医家(侍医)への対抗運動に見ることができる。復古儒学、浮世絵版画、書道復古家、古医家などの対抗運動を総合して日本ルネッサンスと呼ぶのである。ルネッサンスは単なる「文芸復興」ではない。「学芸復興」という語でも適切とは言えない。ルネッサンスの射程は「学芸」を越えている。

第3章 ルネッサンスの原義と内容

ルネッサンスは「再生」を意味する。ピカソ(1881-1973)は1939年にダブルフェースのニワトリを描いて「私はニワトリを発見した」と言った。ルノワール(1841-1919)が少女を、ミレー(1814-1875)が野の朝の風景を、クールベ(1819-1877)が波濤を、ターナー(1775-1851)が霧を発見したように、ルネッサンスは人間と自然を発見(解放)した。

人間の発見の一つの指標は自画像、自叙伝である。新井白石(1657-1725)『折り焚く柴の記』(1716年頃)、国芳(1798-1861)のいくつかの自画像が代表例である。解剖図、本草学、地理学、測量学、名所図会、風景画などは「自然と国土の解剖学」(自然の発見)と言ってよかろう。

第4章 日本ルネッサンス文化の諸法則

日本ルネッサンスにおける復古の特質はその二重性にある。一方で、儒教改革家の古代中国の先秦文化、古方家の後漢医方への復古、他方で、国学者の日本古代文化、和方家の古代医方への復古である。ルネッサンスの創造的方法論は「復古生新」(福本の造語)、すなわち「古^{いにしへ}に復帰して新しきを生み出す」ことである。復古生新の程度は復古の程度に正比例する(「復古生新正比例の法則」)。

考え得るすべての要素を網羅して、それらの相互間の複雑多岐にわたる関係・交渉を総合・比較しなければ、ルネッサンスの端初(始期)を確定できない。その際、各要素の発生時期、発展内容の不均衡的發展について考慮しなければならない。

第5章 日本近世学芸復興期論前史—私の日本ルネッサンス史論の位置づけ

福本の方法論は次のように規定されている。第1に、中世から近世への過渡、すなわち近世の黎明における史的範疇として日本ルネッサンスという語を用いること。第2に、枚挙にいとまのないほどに多種多様な要素を見出し、それらの総合・比較研究を行うこと。第3に、始期と終期を確定すること。第4に、中国明代・清代

文化との比較研究であること、第5に、西洋ルネッサンスとの比較研究であること。

日本における文芸・学芸復興期を不十分ながら指摘した法制史家、経済史家、国史家、東洋史家、西洋史家、哲学者、哲学史家、文学者、作家、洋画家、科学者、医学者、技術史家などの主張を分類すると、鎌倉・足利・安土・桃山派、吉宗による洋書解禁以後派、通俗派（家康の学問奨励）、明治ルネッサンス論者、日本ルネッサンス否定論者、福本が提唱した日本近世学芸復興期にルネッサンスの存在を部分的に正当に認めた先賢たちとなる。例えば、井上哲次郎（1856-1944）『日本古学派之哲学』（1902年）は復古儒学、国学、古医方に、岡倉天心（1863-1913）『日本の覚醒』（1904年）は復古儒学、陽明学、国学に、幸田露伴（1867-1947）『支那文学と日本文学の交渉』（1926年）は徂徠学、国学、西鶴、近松、芭蕉らに、辻善之助（1877-1955）『日本文化史』（全11巻、1949-1956年）は国史、儒学、国学、神道、芸術、医学、宗教などに、ルネッサンス運動の存在を確認している。

第6章 ルネッサンス期に先行した航海貿易の発達

イタリアは西洋ルネッサンスの先駆的役割を演じたが、地中海貿易がルネッサンスに先行していた。ドイツの宗教改革にはハンザ同盟によるバルト海・北海貿易が先行していた。

日本では慶長9（1604）年から元和2（1616）年までの13年間に179隻の朱印船が海外に渡航した記録が残されている。安南（ベトナム）などと通商貿易をおこなった茶屋四郎次郎（1542-1596）、角倉了以（1554-1614）らの海外貿易家も現れた。伊達政宗（1567-1636）が慶長18（1613）年に支倉常長（1571-1622）をローマに派遣した慶長遣欧使節は有名である。造船は伊東、仙台、長崎、大坂の各地で行われていた。

唐の太宗（598-649）と徳川家康（1543-1616）の政治文教施策を比較すると、太宗は多様な宗教に寛容で羈縻政策（周辺異民族の自治を認める柔軟な統治）、冊封体制（皇帝と周辺諸国の君主と形式的な君臣関係を結ぶ）を維持したのに対して、家康はキリシタン弾圧と鎖国施策を推進した。海外貿易、航海・造船技術、文化の移入などを妨げた家康の二大失策がここにあったと言わざるを得ない。

第7章 日本ルネッサンスと鉱山業・鉱山学・貨幣流通

日本ルネッサンスの立役者は町人階級である。商業資本、高利貸資本、生産資本の発展が町人の抬頭をもたらす。それら資本の発

展の前提条件の一つは貨幣経済の普及である。貨幣流通のためには鉱山業・鉱山学の発達を必要とする。

戦国時代では佐渡金銀山、生野銀山、大森銀山などが争奪戦の対象であった。江戸時代に入ると、足尾銅山、別子銅山、釜石鉄鉱山、宇部・高島炭田など各地で鉱山開発が進み、水学宗甫（木原佐助、生没年不詳）による竜樋ポンプと天秤^{おびこ}の発明、佐藤信淵、平賀源内（1728-1780）らによる鉱山学・鉱石学の研究がなされた。

第8章 沿岸航路・近海廻船の開拓

寛永13（1636）年、徳川幕府は日本船・日本人の海外渡航、大船製造を禁止した。それ以降、有為の人物は沿岸航路、近海廻船の開拓に注力する。伊勢出身の河村瑞賢（1618-1699）は幕命を受けて仙台・江戸航路と出羽から山陰・山陽経由の江戸航路を開拓する。淡路島出身の高田屋嘉兵衛（1769-1827）は北国から松前へ、加賀出身の銭屋五兵衛（1773-1852）は松前から諸国へ物産を回漕した。貨幣経済の発達、沿岸航路の開拓、近海廻船業の発展に伴って、廻船問屋組合、両替為替商組合が設立される。（当時の研究が進んでいなかったためか福本は陸運には言及していない。手紙、荷物、情報などの輸送の仕組みについては、例えば巻島隆『飛脚は何を運んだのかー江戸街道輸送網』ちくま新書、2025年、を参照。）

第9章 朱子学にたいする復古儒学その他の抗争とその反動

幾何学の問題を解くときに補助線を引くように、西洋ルネッサンスにおける宗教改革にあたるものとして儒教改革という補助線を引くと、それまで見えてこなかったものが見えてくる。

官学への対抗運動である復古儒学の系譜には、山鹿素行（1622-1685）、伊藤仁斎（1627-1705）、新井白石（1657-1725）、荻生徂徠（1666-1728）らが連なる。素行学派、仁斎学派、徂徠学派などのほかに、熊沢蕃山（1619-1691）、佐藤一斎（1772-1859）、大塩平八郎（1793-1837）らの陽明学派がある。平田篤胤（1775-1843）、吉田松陰（1830-1859）の偏狭な思想は復古運動の反動である。

第10章 国学の勃興とその行きすぎ

国学の系譜には、契沖（1640-1701）、新井白石、荷田春満（1669-1736）、賀茂真淵（1697-1769）、本居宣長（1730-1801）、上田秋成（1734-1809）、平田篤胤らが連なる。

国学者30人（前掲図表）の出身階級は、僧侶2、武士10、神官（神主）・御師6、伊勢出身者3、町人8、医家8、農家2、未詳3となる。合計が30を超えるのは、町人から医家になった者、武士から僧侶になった者などを双方の階級に加えているからであ

る。目立つのは、伊勢出身者と神官を合わせると9人になることである。

国学大家の門人は、賀茂真淵492、本居宣長（没後も含む）2342、平田篤胤（没後も含む）4312を数える。神がかり的で反動的な篤胤派が真淵派、宣長派に比べて圧倒的多数の門人を抱えていたことがわかる。

第11章 歌道復古論の諸形態とその系列

戸田茂睡（1629—1706）が「歌は大和の言の葉なれば、人のいう詞を歌に詠まずということなし」と歌道復古を宣言したのは寛文5（1665）年であった。歌道復古論者の系譜には、木瀬三之（1606—1695）、契沖、戸田茂睡、賀茂真淵、荷田在満（春満の甥、1706—1751）、建部綾足（1719—1774）、本居宣長、良寛（1758—1831）、橘曙覧（1812—1868）らがいる。

第12章 国学者列伝中における奇才の双璧

国学者の奇才といえば建部綾足と上田秋成であろう。綾足は弘前藩家老の次男に生まれた。不倫不義の自由恋愛をはばからず、武士を捨てて藩を出奔する。各地を遍歴して歌を詠み小説を書いた。正岡子規は綾足を高く評価した。大坂曾根崎に私生児として出生した秋成は富裕な商家の養子となる。42歳のときに町医となり55歳のとき誤診で幼女を死に至らしめ良心の呵責に耐えきれず廃業。転々と居所をかえ門人宅で没する。『雨月物語』（1776年）、『春雨物語』（1808年）などを遺した。

第13章 後世方に対しておこった古医方の復古生新

後世方は陰陽五行説や道家の説を重視した金代・元代の医学であり、足利、豊臣、徳川の御用医学であった。それに対して、名古屋玄医（1628—1696）は寛文元（1661）年に後漢の張仲景（生没年不詳、『傷寒論』が有名）に遡って医学を復古生新すべきことを主張した。名古屋らの復古医学を古医方と称する。

古医方の系譜には、名古屋のほかには賀川玄悦（1700—1777、産科学を開拓）、吉益東洞（1702—1773、解剖無用論者）、山脇東洋（1706—1762、解剖学の開祖）、華岡青洲（1760—1835、英米で開発された麻酔手術より40年も早く全身麻酔手術を実施）らがいる。

日本の人体解剖は、明和8（1771）年に蘭方医の前野良沢（1723—1803）、杉田玄白（1733—1817）が『解体新書（ターヘル・アナトミア）』（1774年に翻訳版刊行）を参考にして行ったことに始まる、と誤って理解されている。山脇東洋は17年前に人体解剖を行っており、それに刺激されて古医方派、蘭方医による

人体解剖が続々と行われている（前掲258頁、262頁の年表参照）。

第14章 折衷医学派の発生

御用儒学である朱子学とそれに対抗する復古儒学を折衷する動きが起こったのと同様に、後世方と古医方を折衷する折衷医学派が発生する。系譜の中には、『渋江抽斎』（1916年）とともに森鷗外（1862-1922）晩年の傑作といわれる『伊沢蘭軒』（1916-1917年）の主人公がいる。伊沢蘭軒は渋江抽斎の医学の師である。

第15章 和方家の発生とその内容の検討

御用医学である後世方への対抗運動には古医方のほかにも和方家がある。古医方が概ね復古儒学派系統の医家であったように、和方家には国学者系統の医家が多い。和方家の内容は貧弱きわまりなく掛け声だけに終わってしまった。和方家の一人に平田篤胤がいる。

第16章 兵学復興

中国春秋時代の軍事戦略家の孫武が遺した『孫子』について本格的な研究が開始されたのは日本ルネッサンス初期であった。兵学復興家の系譜には山鹿素行、新井白石、荻生徂徠、山県大弼（1725-1767）、林子平（1738-1793）、佐藤一斎、頼山陽、佐藤信淵らがいる。福本は『孫子』の「兵者詭道也（兵は詭道なり）」の語義解釈をめぐって素行、徂徠、白石、一斎の議論を紹介している。「兵学」そのものの発展については言及していない。

第17章 法学復興—ルネッサンス・イタリアの法学復興と比較して

イタリア・ルネッサンスの法学復興は、ボローニャ大学を中心にした中世キリスト教会の教会法（カノン法）に対する古代ローマ法の復興であった。

中世日本の寺院法は中世イタリアの教会法のように強大な権威を有してはいなかった。徳川幕府の武家法に対抗する日本ルネッサンス期の法学復興は、王朝時代の律令格式、先秦時代における刑名学派（商鞅・韓非学派）の法家思想、明代法制の復興であった。法家復興家（法制史家）は儒学者、国学者から出ている。前者には新井白石、伊藤東涯（1870-1736、仁斎の子）、荻生徂徠、頼山陽、後者には荷田春満、荷田在満が属する。

第18章 ルネッサンス期に発達した史学・史観の検討

日本ルネッサンス期の歴史書は一般通史、古代史、比較研究、伝記類の4つに分類できる。それぞれに代表的な著作を挙げると、一般通史は水戸光圀（1628-1701）主宰の『大日本史』（全397巻、1657-1906年）、古代史は新井白石『読史余論』（17

12年)、比較研究は松下見林(1637-1704)『異称日本伝』(1688年)と伴信友『中外経緯伝』(1838年)、伝記類は伴蒿蹊(1733-1806)『近世畸人伝』(1790年)となる。

第19章 和算の発展とその限界性

日本独自の数学である点竄術(代数の計算法)を開発した関孝和(1640頃-1708)の功績は大きい。和算家の系譜には、関のほかには建部賢弘(1664-1739)、会田安明(1747-1817)、本多利明(1743-1821)らが連なる。

日本ルネッサンス末期には和算書の出版が空前の盛況を呈した。文政年間(1818-1830)28冊、天保年間(1830-1844)60冊、弘化年間(1844-1848)24冊、嘉永年間(1848-1854)26冊、安政年間(1854-1860)32冊となっている。測量術、航海術などのための数学書の需要が激増したためであろう。しかし、和算は生産技術一般や自然科学一般との交渉はきわめて薄く、哲学・思想、論理学などとの関連も欠けていた。

第20章 カラクリ技術の復興と普及

日本ルネッサンス期を代表するカラクリ技術家には竹田近江(生年不詳-1704)、田中久重(カラクリ儀右衛門、1799-1881)らがいる。竹田はカラクリ人形の見世物興行を行ったが、田中はカラクリ人形から始めて明治期に入ると機械製作工場を設立する(東芝の前身)。西洋ルネッサンス期には水車製粉業のマニュファクチュアが発達して近代的機械体系の発達を促したのに対して、日本ルネッサンス期には生産技術一般への応用がなされなかった。

第21章 火浣布製法の復興・風炮の発明・その他

火浣布とは古代中国で火鼠(想像上の怪物)の毛で作ったといわれる耐火性の布である。実際には石綿(アスベスト)を織った布であり、日本では平賀源内が初めて作った。また、国友藤兵衛(近江の鉄砲鍛冶、1778-1840)、久米栄左衛門(1780-1841)は風炮(空気銃)を製造した。

第22章 日本に錬金術がおこなわれなかったことの意味するもの

煉丹術とは中国古代の神仙思想(不老不死の神仙・仙人になることができるという信仰)に基づく不老不死の霊薬(仙丹)を作る技術である。煉丹術には内丹派と外丹派がある。内丹派は自己の心身の内なる修練プロセスによる「気」の養生技術であり、現代の「気功」の重要な源流である。外丹派は鉱物を合成して不老不死の丹薬を作る技術であり、西洋の錬金術(アル・ケミイ)と共通する部分が多い。

中国では宋代以降は内丹派が優勢になる。朱子学が起り禅宗が栄えたことも内丹派に有利となった。

錬金術は煉丹術には見られない特徴がある。ルネッサンス初期まで続けられていること（1890年に錬金術を試みた記録もある）。ライプニッツ（1646-1716）、ニュートン（1642-1727）らの大学者たちが熱中したこと。錬金術と近代科学の間には連続性が存在すること。中国煉丹術の主な目的は不老不死を享受することにあつたのに対して、西洋の錬金術の主目的は無限の富を手にするこゝにあつた。

なぜ、日本では煉丹術（とりわけ外丹派）が行われなかつたのか。福本以前にはこのような問いを立てる者はいなかつた。8つの理由が考えられる。

第1に、日本では仏教が普及したため、それが不老不死の思想の発生・発達を妨げたこと。第2に、鎌倉時代に導入された仏教の禅宗、儒教の朱子学は内丹派と親和性を有したこと。第3に、徳川幕府が採用した正学の祖、朱子は内丹派であつたこと。第4に、徳川時代に漢詩や書が広くもてはやされた蘇東坡（1037-1101）も内丹派であつたこと。第5に、古代ギリシアには万物流転の思想があり、中国でも易経により変化・転換の理が重視されたのに対して、日本ではそのような弁証法的思惟や歴史哲学が優勢ではなかつたこと。第6に、日本では古くから金銀銅などが産出され、卑金属を貴金属に転換する必要がなかつたこと。第7に、中国では宋代から煉丹術が衰退し続けたため、ルネッサンス期の日本が魅力を感じなかつたこと。第8に、吉宗が洋書の禁を緩め蘭学による近代科学の著作、翻訳が現れはじめたこと。

第23章 博物学の勃興と物産会の開催

博物学の関心の高まりは「自然の発見」を立証する一側面であつた。当時の博物学者は本草学者と呼ばれていた。博物家（本草家）の系譜には、徳川時代最初の本草書『庖厨備用和名本草』（全13巻、1671年）を書いた向井元升（1609-1677）のほか、貝原益軒（1630-1714）、阿部将翁（生年不詳-1753）、稲生若水（1655-1715）、田村藍水（1718-1776）、木内石亭（1725-1808）、平賀源内、木村兼葭堂（1736-1802）、山本亡羊（1778-1859）、飯沼慾斎（1782-1865）らがいる。明治期に数多く開催された博覧会の萌芽である物産会は田村藍水、平賀源内らによって始められた。物産図会としては『山海名物図会』（1754年）、『山海名産図会』（1799年）が有名である。

第24章 伊能忠敬による日本近海実測図の完成—ならびに、その前後周辺

日本ルネッサンス期の全期間を通じて、地理学者、旅行家、測量家、探検家が続出する。

この分野でも先鞭をつけたのが『西洋紀聞』（1715年頃）、『蝦夷志』『南島志』（ともに1720年）、『采覧異言』（1725年）を書いた新井白石であった。旅行家としては古川古松軒（1726-1807、松前から九州まで巡歴）、橘南谿（1753-1805、東北から九州まで巡歴）、菅江真澄（1754-1829、信州から東北、蝦夷を遊歴）、蝦夷地探検家としては最上徳内（1754-1836）、間宮林蔵（1780-1844、樺太、アムール河下流を探検）、近藤重蔵（1771-1829）、松前武四郎（1818-1888、「北海道」の命名者）、測量家としては伊能忠敬（1745-1818、蝦夷地から屋久島・種子島まで踏査）らがいる。

各地の名所図会（『都名所図会』『東海道名所図会』『江戸名所図会』『芸州巖島図会』など）、名所風景画シリーズ（『富嶽三十六景』『東海五十三次』など）が出版されたのも日本ルネッサンス期であった。

第25章 北斎筆「黎明の紅富士」とその前後周辺

日本ルネッサンス文化の精華は絵画であるといってもよからう。最も代表的なのは木版浮世絵である。その他にも装飾画、写生画、文人画（南画）、初期洋画（油絵、銅版画）が挙げられる。それらは主に町人階級による町人階級のための芸術であった。

代表的な浮世絵画家には、現代でもよく知られた菱川師宣（生年不詳-1694）、鈴木春信（1725?-1770）、歌川豊春（生年不詳-1814）、東洲斎写楽（生没年不詳）、喜多川歌麿（1753-1806）、葛飾北斎、安藤広重（1797-1858）、歌川国芳（1797-1861）らがいる。浮世絵のジャンルは武士絵、役者絵、相撲絵、美人画、風景画、花鳥画、秘儀画などのほか、名所図会、職人絵尽、各種読み本、山海名産・名物図会、各種産業図、量地図など実に幅広い。「人間・自然の発見」の絵画的表現がほかならぬ浮世絵であった。

徳川幕府のための本画（狩野派）に対抗して起こった装飾画の系譜には俵屋宗達（生年不詳-1643）、尾形光琳（1658-1716）、酒井抱一（1761-1829）らがいる。近年、美術史家の辻惟雄によって再発見・再評価された伊藤若冲（1716-1800）もこの系譜の一人であろう。また、写生画の代表的な画家は円山応挙（1733-1795）、松村呉春（1752-1811）らである。

徳川幕府の御用絵師である狩野派は豪壮雄健奇抜を基調とする北宋画（北画）の系譜を踏襲する。それに対して、文人は優美繊細柔雅を貴ぶ南宋画（南画）を好んだ。代表的な文人画家には、服部南郭（1683-1759）、与謝蕪村（1716-1784）、池大雅（1723-1776）、浦上玉堂（1745-1820）、谷文晁（1763-1841）、田能村竹田（1777-1835）、渡辺崋山（1793-1841）らがいる。

日本における油絵の端初は秋田系油絵である。秋田藩主の佐竹曙山（1748—1785）と家臣の小野田直武（1750—1780）が始めたといわれている。

江戸の銅版画家としては司馬江漢（1747—1818）、京坂では中屋伊三郎（1790頃—1860）、長崎絵（油絵）では若杉五十八（1759—1805）らがいる。

さらに、紅富士（『凱風快晴』）をはじめとする北斎の技法が論じられている（概略は第9章第3節を参照）。